里見八犬傳 拾九編 五十三ノ下

S13
709
106

東京都立小石川図書館

13
門へ
1709
106

明治三六年
十月九日
購求

回外剰筆

頭陀枕中を話説を四十八城
稗史本傳を大成を二十八年

這編い作者の意表を述てもて揔跋ふ代る者ゑ。开ゲ中ふ本傳の迭漏を補ふよりもこれの璧言ハ俗ふ云幕の間ゆ戯房話説の類ゆくまー

文化十一年甲戌の春正月ト澣本傳の作者曲亭主人這小説を綴ゆ為ふ案を拭ひ硯ふ呵しと將新研を開まくも時ふ廻國の頭陀ゆ上總ゆ到る一日著作堂の松の扃を敲ゆて主人ふ對面を請ふ頭陀是を告ぐ主人の道く咱塵を厭ふの故ふ閒堂ふ惟を無れ客を辭して書を讀書を綴りてもてふの平生を送る而已然ゆを世の遐途人親疎とゑく。雅俗とゑく吾虚名を謬認めて訪來て對面を請ふ者幾許名ぞ吾其人毎ふ出て言を費ー日を費やさゞかゞゆ煩へたるゑー。ふの故ふ吾疾病ふ推て敢面をとゑー只相

識の紹介ある客人只得出て來意を述べ開相識を顧れば遠方より
未見の人の書を寄せるも皆かくの如しヨクく吾を見まくほる者両國橋邊より
勾欄戲場を看て故郷へ還るの日話柄のみ欲するが如し遣りねく。
と云て掉ば頑婢あるを以て又出て頭陀に謝まる主人の疾病をもてを
頭陀是を受て否野衲い翁の相識某甲が紹介の簡を齎しるを枉て
對面を饒さるべく主人已に出ぬと請ふて已ざるべ。書齋へ召容れて
對面を主客の坐定りて其紹介の書翰を問ば頭陀答て否其書翰いなを
翁いかゞ知らざる者の只名を慕ふて訪まるる相識の紹介なければ面会
のいまとい云くみよう且是を偽るのもとのふを主人に受めゞ開亦調
戲に過しるるぞや。浮屠家の五戒に妄語を一戒を和僧い既に破戒の
罪あり吾何を受何をいん已ねく。と宥めて立まくまるを頭陀推禁

めて翁且怒を治めて吾のふを受の妄語い五戒の一なれども妄語に亦二
あり或い俳りて利を欲し又誑りて慾を遂或い妄誕をもて人の中を裂く聖
賢佛菩薩を誣る者い必是人に害あり佛の所云妄語是又小児を
權が如く實言るふねど人の悪を懲し或い俳りをもて人の怒を解く誑りを
もてよく人を諫る者い是善巧方便なり佛の所云妄語ふあらゞ警べ
翁の物の本を作りるふ必勸善懲悪を旨とし。よく蒙昧を醒を
が如し。ある亦善巧方便のゝ然を翁い思ひもとし咱等を破戒と罵り
るふい是誣言ふあらぢや。と詞急迫くるひ解けば主人いゆつうち笑ひて
好是いのまこうう。然ば和僧の來意い什麼と問ば頭陀答て道く。咱
等い閑散山居を好むそ山水を愛る癖あれども寡聞駑才ふいへば。古人の
詩歌あるを知らゞ其地の古實を拯ふ由なし只名山靈場をうち巡そ

佛を拜むのみ。徒而這一両年に錫を安房上總に飛し。暫緣久しくして序に在昔房總の國守と雖ども。里見氏の事實を尋ねて其舊蹟を知らばやと思ふを切なるべし。是を土俗に問ふものから。答る所詳ならざるに。或へ曰。昔里見氏の時上總に四十八城あり。今其地を考るに僅に二十六城のみ。其餘に知る者なしとのたまふ。是よりの後又人に問ども益を得ることなし。猶東西とくさぐさ巡る程に。一日疲労て松の下蔭に坐して憶ず眠り。夢に人ありて告るやう。今大江戸に著作堂てふ僻児あり。博識奇才なれども人の師にかるるを好まず。年々に戯れ児戯の策子を綴りて。旦暮に給まるのみ。彼人今茲に書肆の需に応じて里見八犬傳と書名せる大部の小説を作らまくを。里見氏の事實に於ては必考ふる所あらん。盍ぞ彼に問ずや。但し彼人に未見無用の客を斥て。其友を擇ひの故に大都會に在ては同好知己の友きし。這故に彼人及びづから蓑笠と號を蓑笠に即隱逸の義を交竝内大臣の歌に。身のうきたのかくれがにせんと讀るに。心操に同じるべし。是に由て蓑笠を觀て蓑笠の二字に彼人の大関目なるものを世人並て是を思ひぞ其高名なる所云ふいうで一ぞ對面して我曲亭と相識ることを。俗に誇まく欲まる隨意漫に刺を投じ屢執接児を煩せて果さざるも又らん和僧先にあるを以て非如那里へ造るとも。紹双のしとて饒されども固様々のひ洪へよと告るを思へば夢覚けり正に是靈夢に似たれば心悄地に欽びて水更津船に載走らせつ。斯に訪まうしに果して輒く容れらるべき紹双のと俳りしに彼夢鬼の教に依まり翁里見の小説を綴らんとて既に稿を創めるに彼家の事を識る舊録軍記地圖などを。又く看るべきものをもらん先彼四八城のあり地方を知らまく欲きいうで教ひねと額衝に請ふて已ざりしを主人に

聽くうち笑ひて客僧妄語多くぞとも。なほそ又りくまでふ善巧方便の事ぞや。
夢中ふ人ありて吾ふ問とのまへ〜とへ。敲くでも知る死寓言多くん。開ハ左まれ右も
あれ今吾綴り創ねる里見八犬傳い架空の言のみ事實を正さとふ要なけまま
ども素より尚古の癖ありまへ。折々其書を求獵ふ安房上總の地圖なども。
即彩の本なけまへ。究めそ彩易くぞ又里見の舊記ハ其写本。坊間ふ〜只
吾知る所をもていつ〜里見記里見九代記房總治乱記里見軍記ありの
這内中里見軍記い坊間ふ寫本ありまへども。就中珠函ふ〜七且訛舛も甚
ねば考證ふ備るふ足らぞ。里見記とのふ物。四五本ありと〜ぞ吾其異本を
いまぞ見ぎ去の餘ハ北條五代記甲陽軍鑑及本朝三國志などのふ俗書ふ里
見の事を載まへども。他御の人の筆ありまへ。必僻ふ〜る事多ふ〜ぞ只近
曾上總國寺濟郡。臼井御長者里人中村國香の著せ〜房總志料

五卷ありのいまぞ全豹を見ふ足らねども。房總の地理及里見の舊趾なども
粗載て且編物の考ありまへ吾這著編の栞とも。憶ふ上總人の和僧ふ合て
四十八城の内中今其名を存まる者二十六城とのひしふ恐らく其人の考ふる所
ありぞ房總志料ふ憑まるるらん。彼書上總の附録の卷ふ四十八城の辨あり。
是を載る者二十六城之是見ると驚〜其書を合ひ出て兩記示せ頭陀受
戴さて是を讀國香曰割居の時所謂四十八城と稱まる者上總ふ二十六城
ありて左ふ録さ戰爭興廢の事ハ別ふ考ふ記ふ〜ものあれば今あくふ省く其二十六城
大田木東隣政木大全居城根小屋城とのふ其後云々堤の下城世ふ編物の考あれどもあ要ふ〜ぞ
土氣山邊郡　東鏡山邊郡　舍人埴生郡
説前ふ詳之　槙本長柄郡　説前ふ見えう　椎津望陀郡　説前ふ見えう
久保田望陀郡　里見記ふ明應三年。里見義成久保田の城を攻るとあり。城主の

第一義實
第三義通
第七義弘
世十將繡像
見十
第五義豊
第九義康
第十忠義

第二義成
第四實堯
第八義頼
第六義孝

姓名逸き

造海郡今の百首浦の事ゑ○勝見郡房總治乱記に勝見御所北時田左兵衛正垂支配とあり。國香按るに御所ハ鎌倉持氏の餘裔歟と思ひしに彼土人の説に御所ハ新田義貞の後裔なて土寸崎の御所と稱き天正後云々○真里谷望陀郡説本編に見えず○池和田垣生郡説本編に見えず○勝浦隣郡説本編に見えず○一宮長柄郡説本編に見えず○小濱隣郡鎗田美濃守居城房總治乱記に載き始里見氏に從ひて三浦へ渡海ま又云土岐家臣鎗田美濃守とあるを見まべ後に万木に属せるべ○鴻臺下總の國府臺にあるぞ房總治乱記に載き三階圖書助居城後に万木の土岐氏に属き○万木隣郡房總治乱記に載き万木城主土岐彈正少弼頼春ハ貞頼入道啓岩の子ゑ國香按るに土岐氏墓寺海雄寺とりに禪院に為弘為頼。頼春。三世の影像を置啓岩事いまだ考ぎ田陽軍鑑十三將の内に万木少弼とあるハ頼春の事ゑ○矢嶽隣郡房總治乱に載き。麻生主水佐居城万木に属き○鶴城長柄郡治乱記に又云鶴見彈正居城万木に属き○鳴土武射郡一作鳴東羽賀伊豫守居城○帆丘長柄郡黒熊大膳居城後に里見家に属き。土氣阪井氏に亡ぼる○久留理望陀郡又云里見越前守居城里見記に云里見実尭久留理の城を築くとあれば後に里見越州を護らせーるべー○佐串天羽郡朝倉能登守景隆居城里見氏に属に。○鬼本其地詳今○廳南垣生郡武田信栄居城里見義弘國府臺敗績後も自立ち○峯上天羽郡天神山の上に峯上とゆ所あり。里見記に載き峯上の城主真里谷入道道環とあり。本編に載る望陀郡真里谷村の城主是又土人相傳て同名とき。思ふに道環とゆ人峯上真里谷を六代にせーるゆん本編に渦とゑバ。追て記本傳の作者曰鬼本ゆ鶴一城逸き。本傳に館山の一城（以下三城追加ぎ。以上二十五城之内今其數を考べー）國香按るに右

四十八城の内上總ゐある所二十六城其他ハ下總武藏上野等ゐあるべし。前説ゐ据るゐ二十六城悉里見氏ゐ屬せるゐ知るべし。獨廐南の城主のみ甲州ゐ屬せり。勝頼滅亡以後里見ゐも北條ゐも屬ずして自立せり（以上房總志料）と讀訖る頭陀袋ぞ卷を閉ぢて主人ゐ向ひて謝して道く。御庇ゐよりて年来の凝霧亟ゐ霽れて始て天日を見るが如し。現ゐ書ハ讀べきものなりけり。就て又問奉る。戰國の時諸士の米邑ゐ貫ヨ寡と録するあり。既ゐ這房總志料ゐも。編者の言ゐ里見氏の時知行割ゐ貫高をゐ者あれども。いまだ詳らかならずとゐり。翁ハ必考あるべしと教ゆ。ひねと詰れく主人ハ點頭て然こ吾も亦其貫ヨ寡ゐ思ひ煩めざるゐあらず。北條ハ分限帳ハ諸士の米邑を。並て幾貫文幾百文と録せり。里見氏の諸士録もかくこそありけめ。甲斐名勝志ゐ。粗貫ヨ寡のみとゐれど詳らかならざる。這義を注せる物を見ざれば其大槩を知るべからず。愚按ずゐ。田圃の收納ゐ永幾貫文幾百文とゐり。今も年帳ゐハ

是を永錢とゐ筭師の人ゐ教るゐも這法ゐりまの永錢を永樂錢と思ふハ遠今。永ハ穎の假字ゐ秋穂の義ゐ田圃物成其價を録を故ゐ穎とゐふ筆の異名を毛穎氏とゐも其形稻穂の孕るゐ似てまぶ然ども穎ハ其字畫多くて世俗田舍児などの書ゐ煩しければ假りて永とも永ハ金壹両を壹貫文とも。金壹分ハ永貳百五拾文貳朱ハ百貳拾五文なりゐ今の銀價直をもてきれば銀六拾錢ハ永壹貫文ゐ銀ゐ幾匁と書く匁ハ唐山ゐもゐて錢の省文ゐ當時米穀ゐのみ錢の貴きゐあらず元弘建武の比楮鈔行れ續紀て京都將軍の中葉より弥錢も銀も寡ゐ故ゐ物の價の廉くなる室町殿日記室町殿物語などを見ても知らるゐ是ゐ由てこれを觀まば昔ハ錢壹貫文をもて。玄米壹石ゐ易しゐ其壹貫文ハ金壹両なれば今も俗ゐ云石壹両是ゐ石斛ゐ十斗を壹石とき。即石ゐ又其壹貫文ゐ所以ゐ秩録の物成の收斂ハ三之

一ゆゑ米壹石なれば是を三ふ分て三斗五舛を貢米とを送る所六斗五舛を又二ふあゑ其一ハ畊者の得と。又其一ハ明年の種子とを俗ふ云三物成是之四物成も是ふ準へて知るべし。然ハ秩録の穎壹貫文も主士の況ねる呼其実ハ三百五拾文ありけん狄いまだ知るべからぬ年の豊凶ふよりて米の價ふ過不及あれども。其大槩を執て石壹両と定め者之是ふ由て注まれば穎壹貫文ハ即玄米壹斛ふて其實ハ三斗五舛なるべ。這法則をもて推せば百貫文ハ百石之千貫文ハ千石ゆゑ。其實ハ百苞千苞なるを知るべ。貫文寡の事這外ふ仔細あるべ。

おもゐえを又秩録ふ高と書ハ文寡の假字之孟子ふ五穀文寡同則價相如んとあるが如し。然ども文寡も穎字の類ゆゑ書ふ煩しければ便利ふ就て高と書來るなるべ。語次ふ云上古唐山の聖人唐虞三代及成湯文武の時ハ民ふ取るふ井田をもてせ井田ハ譬ハ田一町方二百四十間なれば則是を九ふ畏て

其真中の一を公田とを公田とハ貢米ふ備源義之詩ふ雨我公田遂及我私

	公田	

といへるハ是之。天朝も上古ハかくこそありけ。仁徳天皇の御時ふ三年の貢を禁めて民を富しめたまひしふ故事あるを思ふべ。和漢戰國の世ふ至りてハ賦用續ざれば民ふ取るのおのづから文くなるべ勢ひ之今ふして井田の法ふ因ハ士を養ふを況ざるべ。今の世ふ生れて古の道ふかへらべ禍彼身ふ及ぶとのひ。聖語をも亦思ふべ。只故を温て新を知るを学を好とゆへ況のみと。丁寧反復して解示せば頭陀ハ听り感佩して額衝紀義て且道く人を誨て倦ざるハ則君子の忠恕野衲初て推参して御著述の妨ねる罪を饒さまとしのみならず一を聞て二を況る欽び何事ふ是ふ優へ況古言ふ云ふ。與君一夕話ハ勝於十年學又云聞名不如見面見面勝於聞名復云ふ見参仕らと告別して出て去ぬけり是年文化暦成冬十二月八犬傳第

あるとぞ。又また一輯十回五巻刊行の書賈山青堂發販も。其明年の冬第二輯五巻出るゐ及びて這書をの者漸々ゐヌクり第三四五輯ゐ至りて本傳ヌく賣ぬるゐ山青堂他事ゐ躭りて本錢續ぎやありけん是ようの後書賈涌泉堂其舊板を購求ゆそ代りて第六輯を刊行き然ども是も亦其人ゐあらざるべ第七輯を彫ぬる時文溪堂の帮助を沿て辛くして發兒ぢけり。この比本傳いよ〳〵時好ゐ稱ふて其利尠くいとど増えるがらこの両書賈の笑ぎ用ゆそ刊行中絶ぬる者徒ゐ前後五六年を歷さう。恁而今の書賈文溪堂が其舊板を咸購ゆそ第八輯九輯を續刻發行ぬる隨ゐ是書の流行類稀ゆそ只江戸京摂のみ。縣田舍同渙浦樵山約莫足跡の至る處舟車の通ふ処年貢の出る所店賃を債らく所鷄犬の聲きこゆ処洪鐘の響く所國字四十七言を知る田翁野媼山妻牧童約血氣ある者是書を見て愛玩ざるはなし。と云風聲耳ゐ暇るゆまで年々是をゆざる日はなし。柳本傳初板の年より光陰流る水ゐ似て老の至るを知らざりける。作者古稀又半ばなる今茲天保十二年辛丑の秋八月ゆそ星霜二十八年ゆそ本傳稿本思ひの隨ゐ全局を結ぶ折ふ彼頭陀何者の風ゐ吹まけんいと珍らかゐも訪來ゐけり。延ゐ別後の口説訖りて頭陀が道く昔年御教諭を羨まつりしより忘れうゐあらねども年來西海南海なる九國四國を行脚して淹留の地もヌクりけまゐ幾春秋を累ねる。疎濶の罪を饒させの人去歳より又安房ゐ到りて某甲の院ゐ居り西ゐありても東ゐありても只八大傳の流行ゐ耳目を驚ものこころれいかく八犬のうちうーさゐ叱らまさうぐんと思ひるぐ。俺ゐ居ー関の門を踰て推參仕りぬ相別れまつりしより傳まゐ三十稔ゐ近ゐ翁も痛く老のひゆ琴山嶺君の早逝ゐ八大傳の附録ゐも識さまとるのゆまゐ驚き悼む所なるぜ。今さらゐ又いひ出て物を思ひせまるべうも

わらぢ二十稔あまりこえう比より故賢郎琴嶺と同居ゆゑ神田ゆいまさるこ人ゆゑ
聞くれども其の山檀ゆゑ居のうへ知らで尋拓こうゆゑ八犬傳の巻巻ゆゑ第九輯四十
五の巻まで年々ゆゑ續出さるゆゑ待ちぞ閲しこうければ公猶の今も恙なく在ませ狭び
思ふ心のまゝのせうるへ一日もとやく結局編を見まくゆゑ稿本い送もるく綴り
果ゆゑ欲厭しらぢへ一巻ゆゑ内見を饒さゆゑとこれて主人い領きて。
然之九輯ゆゑ編ゆゑ第四十六の巻より第五十三の巻ゆゑ第百八十勝回の下編
まで九巻ゆゑて局を結びぬ追刻の音巻と共ゆゑ全本一百零六巻之其四十七の
巻ゆゑ楮数ゆゑきをもて整て上下ゆゑ分ちゆゑ四十六より五巻ゆゑを今歳の冬發販
もぐく送る所五十の巻より下五巻も續ゆゑ明春出まぐゝと云。刊行の書肆文溪堂の
情願ゆゑ任せより是見ゆゑ臂近る。稿本四五巻を合ぶ抗て出ゝ示せば頭陀受戴
きて讀ゆゑ及ぶぢ甲乙と閑き見て且訴りて。御稿本ゆゑ女筆ゆゑ何ぞ自筆ゆゑ

のまゝまゆゑやと問れて主人い嗟嘆ゆゑ堪ぢ然之。去の三四年來我老眼年々ゆゑ病
衰ゆゑて去歳の冬十月より書を讀ども字を寫ども絶て不自由ゆゑりゝ只得
婦幼ゆゑ代筆させゆゑ這稿本を綴りゆゑ。とゆゑ頭陀い眉を顰めゆゑ开い不便ゆゑ
こゆゑ彼の琴嶺君世ゆゑいまそうゆゑ其。くゆゑ折筆労の帮助ゆゑてせゆゑんゆゑ今い
千萬惜むとゆゑ。稿本の代寫を命じゆゑ門人いいぢやと問ゆゑて主人い
頭を掉て否とよ。洒家い昔より戲墨ゆゑ門人とゆゑ者ゆゑ三四十年以前吾戲作
ゆゑる画策子ゆゑ門人魁蕾子（偏作傀儡子）ゆゑどゆゑ名號を出ゝゆゑるもゆゑど开い未生の
人ゆゑ一時の戲れゝ實ゆゑ其人ゆゑるゆゑゆゑ。然を文化文政年間生在ゆゑる壯俊
ゆゑぢ吾弟子ゆゑ。ゆゑて由縁ゆゑ就て紹介の人を求ゆゑ漸次ゆゑ訪來ぬる者
八九名ゆゑぢ吾一人も是を許さぢ且其輩ゆゑ諭ゆゑ。戲墨い讀書の餘樂
ゆゑ吾真面目ゆゑゆゑ是ゆゑて旦暮ゆゑ給ゆゑ又是をもて有用の書籍を購ん

とそまろ之素より宜敷技とゝ思ひぞ己が欲せざる所をもて何ぞ人に施さゞる入門の美へ
決て兼ぐゝ各這無益なる遊戯に光陰を費さんより其師に就て学問せゞ必
稗益ヨリなるべ一且戯墨の師に従ふて学ぶべき者にあらぞ各其才に儘さるのミ
吾ハ唐山人の稗史小説を多く見て其文其巧致を擇ミて他に效へり。晤
譚の為に訪れんハ聊も厭ふまぞ御所望の一條ハ思ひ絶ゆるどのふに各望を
失ひぞ。猶懲ぎまに折々訪來ぬるものゝ一べ其壯佼等のあるひの為に身を
脩め家をそのべ所を説示ー又暇ある折ハ老子荘子などを講ずるに打眺を
催ずるハ稀なりし所が中に入門御辭退の義ハちゝ及ぶ。ひそ戯號に琴字を
許ー之との琴字をもて名號に做ま者ハ吾のまるゝも昔も今も。儒者に琴所
琴臺などあり。所ハ各位の隨意なるべ。とのふに皆欲ぶそ或ハ琴雅又琴梧或ハ
琴川又琴魚などと告る者五六名ありしどもまゝも一両稔の程にて夙く胡越の

如くふるりけり。今思へ。三十餘年の昔なるとべ其人猶生るや死せるや。ゆくゑ知らぞ。是
等の内中に樵亭琴魚ハ同じくらぞ。他ハ吾知音の友伊勢人條齊の弟ゆゑ。
窓蚤餘譚青砥石文などの物の本の作者なるーに惜むべ。四十餘歳にて身故り
ぬ。這他女流も遥に吾に書を寄て所が綴りくる筆子の稿本を示ー雌黄を
乞ひーもあり。或ハ戯墨の弟子にあらぞ其親をもて請ー少女もあり。近曾
又一婆婦の消息ー其子の教へを内を理へをとゝを問ぞもあり。けり志ハ然るとゆゑ
感じ思ふにあらねども。婦女子なれば父合ざるに所が中に陸奥なる真葛てふ女も
嬬婦にて吾に七ぞ歳の姉なりと。ゆゑ一に和文の赤拙
ふぞ且殊なる男魂をもて獨考とゝ。議論の書三卷と奥州たゝ一ゑのに隨筆一卷
又磯づゝとゝ紀行一卷其餘も小冊子三四卷綴りを吾に寄て筆削をとる。
切なりければ吾已をえず獨考論とゝ二卷を編述ーて是に合ゆ。然ども是も女流

うれいに辭して久しく交はりを文政元年の春より後七稔ばかりを歴て竟に鬼籍に入りぬと風の便に聞えけり是ぞ要るに夏辨ずれども門人なりしのこいつ。実言るとりを思いれんとそ漫に諄言たつるあるとそ告るべ頭陀に感嘆して世の戯作者に門人弟子の一名も夏紀を栄ふして某甲某乙と其書に名を録せも是やるに公羽の用意に格別ゆて人の及ばぬ所あるべし。扨御眼病いろいろいや甘に易るぬ病尼るれいぐそ療養效驗ゆまと本復を祈るのと然るゆも這稿本を安筆ゆよくも代寫せしまーのみ見るに漢字も假名使ひも皆誤ゆらざるに非除教るふとも容るる完事ゆまを這筆も示ーるひれと請れて主人に嗟嘆に堪ぎ。然いとよ其るるれ言夏くとも緩やるに坐して徐に筆を吾髪歳の時よりして書讀ゆを好ーるべ成長に及びて一日も書巻を把ざるとなし。恁而寛政三年の冬。創りそ戯墨の画策子二巻を編で書肆甘泉堂に刊行せしより今に至て五十二年刊行の雜書物の本共に二百九十餘筆に及べり。這他刊布せざる筆記雜纂或は二三葉の小紙子夏るを數へ盡をへらもあらぬ就中文化年間に書賈ゆ乞るく大小の物の本夏るけるべ日毎に夙に起出て机案に面ひつ其夜人定まを稿本を綴りて人の為に疲労を厭なぬ。爰の時過ては睡氣つくまで書を讀でみづからの楽をゆを。倘佳境に入る時は天の明るを覚ぬ隣鶏の鳴くに驚されて躍て起出て又机案に面ふ日もありけり。恁而年來を歴ぬる隨に逆上口痛の患起しより年五十に至ては齒は皆年々に脱て一枚もあらざるぬ且夜枕に就く時仰ぎ臥せ。瞑眩して堪らぬ。横に臥せばさもるうきさの比一名醫と晤譚の折。吾がの事を告ーるべ名醫驚きて足下生來血氣人に勝れられず人の氣根に渥りあり九石の弓も毎に緊く張て緩めざるべ其弦断ざるを汲ぎ其楽む所をもて名利の為に殉るは賢者のせざる所と今より些ー緩めよと

いつまでも一義の理りをれば吾答て教諭兼りひね各利の為ふ身を忘れて無益の
筆硯ふ耽るふあらねども少うし時愁ふ義侠の心あり〳〵べ今ふ至て其癖うせず
一旦書賈ふ諾ひ稿本を等閑ふ做も時い他をん發販の時日後まで利を失ふを
恥らぎ是も亦不義ふ似れば事のたくふ及べを思べ思ふ恥ひきと謝して是より
夜学せど物の本の稿本も年ふ二板と相定て其餘ハ需ふ應ぎるとなく夜ハ人
定を限ふしたやく枕ふ就〳〵べ身も漸々ふ安くおがえて仰臥しても瞑眩せぎをきく
養生を宗と志ける程ふ吾還暦の年丁亥の夏より秋まで大病ふ罹りて命危ろ
かも幸ふして癒りふ左右ふ成る程ふ九年以前癸巳の秋八九月の時候ふやあり有
一朝不圖起出けるふ右の一眼見るを沙ぎ。うち驚き且訝りて故児ふ示さふ。瞳
子上の方流れ療治をさるべ〳〵とのひけり其後親族朋友書賈等まで治療を薦る
者是〳〵ぎ吾敢從ぎ且おもへらく吾ハ幼稚より眼の患るく流れ目ぎふも病を

ゆらぎ。然るを今一朝ふ右明を失ひしん年來讀書筆研の疲労るべく且冬春毎ふ
高き火桶を坐右ふ置て。机邊の寒氣を防ぐ。既ふ久〳〵べ其火氣何
時となく右明ふ入て。乾うさ〳〵ゆらむ。ぎらん聲ハ老樹の片枝立枯ふ
異るぎ。非如醫療ふ術を盡さとも。草根木皮のよく及ぶべふ。ふゆらぎと尋思
ま。一日も筆研を排斥せど。初ハ硯心見難て毫を染るふ不便るべ〳〵ふそれも
熟てハ不便ふも思ぎ。其後故児の憂ふ丁〳〵年も世渡りるべ忌ども関てハ
又筆を把らざるを沙ぎ。其次の年四谷ハ移徙ま。左明ハ異るるければ
著編ハ倘年々ふ綴りぬる程ふ戊戌の春の時候より。何とぞく左明も亦翳む
やうるし夏ふ至りてハ。いやく其異るを覚しらぎ。倘悟らぎ。ふ眼鏡の
曇りる故るぎめと謬思ひて。俗ふ本玉と欲ふ水晶製の眼鏡の價貴を
厭ぎ。此彼と求く購求ぎ。掛替々々凌ぐ。ぎ〳〵己亥の春ふ至りてハ。

文溪堂藏

うきみて病眼なるを知りながら本傳のまゝに大團圓に至らねば書肆の需を推辭もいなせで。猶辛じて綴る物は外にもあり。けり。恁而去歳庚子の春まで本傳の稿本も故の如く十一行の細字にして。夏に至りては只矇々朧々として細字を寫すばかりなれば其稿本を五行の大字にして。其もまた捞りあて去歳の秋九月本傳第九輯四十五の巻まで綴り果して刊行の書肆文溪堂の責を塞ぎぬ。

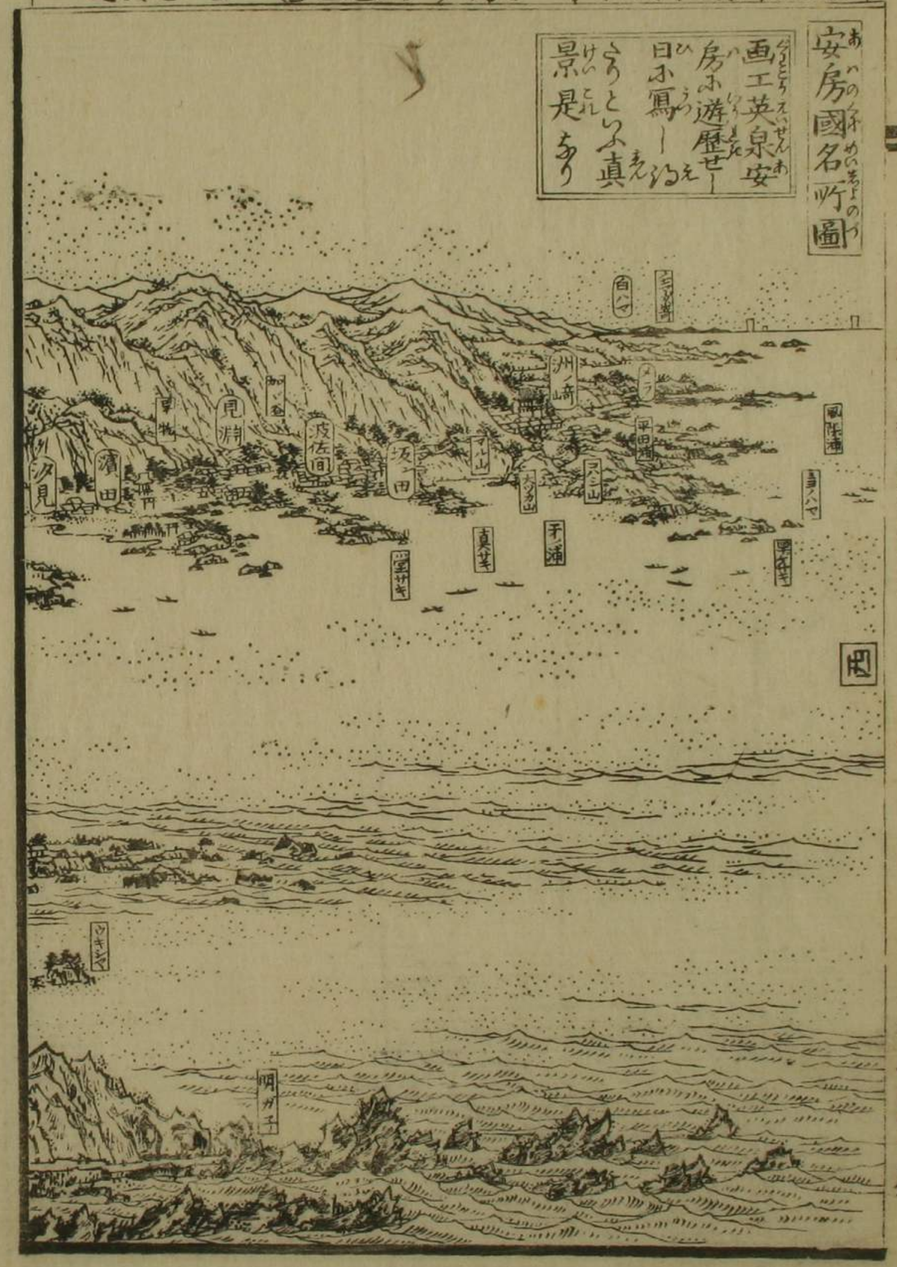
明年四十六の巻以下を綴り果さんと心許なく先や倘なくてある程に今一巻なりとも綴らばやと愚心を励して第九輯百七十七回一顆の智玉途に一騎の驕將と懲をとゝめ一段を五行或は四行の大字にして。且墨の續くれば処ありて讀がたしとのゝ。開を宅眷に補せるとあぬる程に十一月に至り天宛雲霧の中に在如く又朧月夜に立に似て一字も寫さるゝ只筆研不自由なるのみなる書画を見ても楚と見えず。僅に晝夜を辨じ東西を知るのみいとまもせん術なければ書案を退け筆を投捨て獨歎息のあまりに。

なるかひこそなけれ見えざるゝ書巻川に猶こゝろ世やとうち詠じて。爐に寄ての居程に文溪堂及貸本屋などの者さえ少知りて皆慨しく思はるゝ為に代寫さえ人を索るに意に稱ふ然る者のあらべくもあらざる吾亦失明て生甲斐もなければ這年の秋九月より次の年まで人の薦る醫師を三名まで轉藥まぬまどもいまだ亳も效驗あらざる。然ば今茲辛丑の春に至りて。吾又おもふに八犬傳は今昔有がたき大部の物の本なるに始めて終るまでは看官の飽き思はんのみならざる文溪堂が為には後々までも利を全くせずして遂憾こそあらんずらめ人の為に謨りて忠なるゝぬは吾も亦恥る所なれ然はとて吾孫興邦は倘乳臭なる机心なせば且武藝を好め原本性なれば恁る帮助なるべくもあらざ。他が母は人並に書もまなれば教て代寫させばやとやうやくに

思ひ久しう第百七十七回の中音音が大茂林濱ゆて再生の段より代筆さゆて一字毎ゆ字を教え一句毎ゆ假名使を誨るゆ婦人ハ普通の俗字ゞも知るハ稀ゆて漢字雅言を知らぞ假名使てゆをはゞゆも辨へぞ偏傍ゆ誤ゆ只言語をのみもて教えて寫まる吾苦心いかべうもあらぞ況て教を業て寫く者ハ夢路を辿る心地して困ゞて果ハうち泣くや然而代寫一枚ゆ満れば讀反さゆて又教て傍訓を寫まるゆ熟字を知らぞ又句讀をあろゆれば讀時或ハ字を脱し或ハ字を添て讀めゝ讀まゝ輒ゝとざるゆ知らぞあろゆざるゆを口授せゝまて寫く者の艱難を思へばと痛ましゆ幾度ゝ己ゞやと思ひ返又思ひ入て筆捨の松のふる葉も言の葉も子ゆふを〜てかゝるゞ憂ゆとうち詠ぞて且慰めつ一二巻代寫させぬる程ゆ他もやうやくゆ熟て苦心初の如くゆあらぞ偏傍ゆ誤ゆ悟ゆ人知りて言を費まも舌の疲るゝまでゆ至らぞ

編中の出像ハ代寫さゞ者なければ吾只其人物を圈點しまて画工ゆ作ゆるゆ委細ゆ注文を代寫させぬるのゝ稿本へさゝと書画工の寫本も吾ゆ如く寫りや否心許なく思へども術なし況文中ゆ故事なゞを引用ひんと思ふゆ原本ゆ渉らざれば暗記の失めゝんを恐れて命じ其書を含み出させて讀まるゆ漢籍ハ及ぶべもあらぞ假名まゝの古書ゞゞ傍訓ゆ誤ゆ讀ぞ強て讀まれば駄舌俤離ゆて要をなされば援用ふべくもあらぞ寫まるゝハ吾見るゆめゝざまべいよく難義ゆて實ゆせん方なし然ども教誨を義る者の困ゝみぐるも倦ずよく勉ゆめゝざまべ這十巻を綴り果しゝ局を結ぶゆ至らんや縫刺の技薪炊の事なゞを他ゞ職分なれ文墨風流の事ゆ代らぜて其要を做さまく欲まるへ理なしとも理なしを知るゝも月を累ねて今茲辛丑の秋八月廿日とのゝ日ゆ本傳第百八十勝回の下編附録目諸將の成敗其尾を備ゆもと

文溪堂藏



の結局大團圓まで稍稿に果てゝ喧無益。老の諄言よとのひつ呵々とうち笑へば頭陀い感嘆の聲を洩しまで。姑且して道く。誠に翁の老實多。和漢今も古も。稗官者流夏られども。もうくまでふ苦労しを書肆の為に難義の筆を果しのふい有ぐ。心操ある者を江湖上ろう看官い只管閑に見過しを反好事を論ぎろもあらん。適ま書の大部なるも人の為に稗益ある。有用の雜纂なまーかゝ。労しても功ある〳〵ふ然る物い世俗の見まく欲まつい稀なる故に書肆も乖刊形はせまく欲せまで求る所い只是のみ。這故に翁を。稗官者流に微しー思しぬる。あも亦天乎命なる乎。惜むべく。と繰返しつ嘆息しを。人いろへ理りなれども。是等の策子にあらされば吾年々に編でまて半業に做を王をのぶと。昔清人毛聲山い小説傳奇を好る隨に嘗三國志演義を評註ま。其妙金聖歎が水滸傳評註の上に在り。ま。ろるに他不幸にしを老後に失明に做りーくを。好む所を棄ぐくやあらけん。又琵琶記を評註あるに及びて一二の子弟に口授し代寫させてもて稿に果てたとのう。昔吾琵琶記を讀て是を知りぬ。他と吾とい同好なれ。且眼の患も相似られど。其評註の精妙なる。みづから筆を把まるが如し。蓋唐山い文字の國にて子弟に文字なる者なければ。其ひに所を一字も遺ぐよく代寫せしなん。天朝い言語を宗とを素より文字の國風なるに。婦幼に代寫さまるに官を病りて思を構る。波瀾曲折の文何所より出し來つ。僅に其意を達まるのみ。然へ筆工に寫せしなるも。又其本も婦幼に讀せて校訂ぬれば。脫字とそ外あもまれ。誤字い吾見るにあらざまべ。所を正まに由もなし。看官うくと知らざまべ。校訂疎漏とそ笑ふもあらん。讀者い文章の觀に管らぎと。莊子にいう。文章い文字のうのみるにあらねど。讀者りに在て文場に遊んや。僅に詩を賦歌を詠のみ又牧棄が江賦に水母以鰕爲眼と

いう。吾鰕子をもて眼ゐせん欤其鰕子も亦ゐるゝ。是ゐ烏呼の遨遊されば好まぬ人い誹謗るもわゝん小説物の本の大筆妙文るゝを憎む者昔も和漢ゐ是あり。羅貫中い水滸傳を作ゝ悪報ゐそ三世唖子と生ゐたとゐ續文獻通考ゐ誚あり又紫式部い源氏物語を作ゝ悪報ゐそ地獄ゐ墮さうと人の夢ゐ見えゐたといふ。寶物集巻四ゐ這證文ゆ。水滸源語い稗史物の本中の大筆妙文ゐそ或其傳山賊の義侠をもて。或い貴介淫婦の事を上旨と綴りくまべ和漢同日ゐ是等の誚あゝゝん。倘ゐるゝまい西遊宇津保も大筆妙文るゝゐ是等の作者ゐ唖子墮獄の悪報ゐたいゝゐぞや。這故ゐ唐の韓愈い得識名示從とゝう是ゐ由てゐまと觀まべ吾も亦ゐ犬傳を作ゝ悪報ゐそ老て半盲ゐ做りゐたとゐ誠誚もやゐるべゝん非如何ともいゝべ吾髫歳より讀書を好きて和漢の歴史諸子百家の書小説傳奇歌書草紙物語ゐ至るまで覘いゐる所ゐく聖教賢誨の辰ゐたいゐ。

四書佛經ト筮方位皆其一隅を獨学して孤陋ゐるも和漢の治乱君臣の得失士農の務ゐ工商の巧拙奸直貨殖清貧の樂む所獵渙牧樵のゐる所名所舊跡禽獸草木の名戈と不戈と人情の厚薄浮薄其大既を識ることゐる学問の餘樂ゐ。且蒙昧を醒さん為ゐ戯墨の策子を編做して書肆の需ゐ應じる。其潤筆ゐそ足らざるべゐ毎ゐ衣食を省き節儉を旨として和漢必用の書籍を購求る者五十有餘年其書藏めて五六千巻六十餘樓ゐ至りゐも貽畀んと思ひ子い早逝して吾も亦老眼衰眊して讀書得ゐるゝ做りくべ咸沽却して紙魚も漏さぬ事皆画餅ゐるものゝゐ。猶肚裏ゐ残りゐる些の書ゐり文ゐるをもて恁ぞゐの口を利而已不幸くの如くゐる隨ゐ昔唐山孔門諸賢の得失を思ふゐ子夏い老て子を喪ひて竟ゐ失明ゐ做りゐ時曾子是を吊ふそうち哭たくべ子夏も亦ゐゐ

哭して。噫天なる乎吾罪あり。と呟いて。曾子始めて商子夏（商子夏は人の名）汝何ぞ罪なきや。其三罪を挙て是を責しに。子夏杖を捨て謝し。語い禮の檀弓に見えたり。夫子夏の賢なるをもて。猶三罪なるを以て。況己が如き者い五罪も六罪もあるべし。たれども曾子の意い子夏が三罪ある悪報にて失明したりとのみにて。子夏が罪なしと呟くに就て其三罪を責るに老て子を喪ひ又失明なるを。数へて其愆を知せし。倘たらばこそ伯牛の大賢なる。其徳行顔淵閔子騫と伯仲を然ども彼身不幸にして癩を病て命危ふかりし時孔子是を訪ひ其臭氣に堪ざるべ病の林に入らぎして其窓より手を取て死を命なる乎。此人に七去の病あり。とうち歎じ其罪を責ぎ。伯牛素より罪なりれば。約莫人の非をいふ者に二あり。其冥罰なきを挙て愆を知たるを。即明友の信に又只己が好憎をもて其合ざる所を挙て是を責るに好て人の悪を

のみ。文化年間浪速に赤水と號する者あり。播陽五島名い恵迪字文敏と稱を五年己辰秋他が著しる赤水餘稿一巻あり。其編中に吾を論ずる酷く且吾を比するに原壌が蹲居を以て。吾を罵るに賊を以を當時吾友京師なる角鹿比豆流是を吾に告て為に解嘲の文を作らんとのたまふを吾許さず且論じて道く。好て人の悪をのぶる者い聖賢の憎む所。他と吾とに相識るまじ且纖芥の怨ぶも他何等の人なれば恣に吾を論じ忌憚ることなく罵るや是必狂人なるべ。狂人の走る時不狂人も倶に走れば是狂人に異ならぎ吾少なく時に争氣ある人なるのみぎ。他が如ぎい齒に掛るに足らぎるに可惜紙筆を費して解嘲の文を作らば大人氣なるべ。吾今赤水餘稿を閲するに他が第二子を悼む文に其子の遊女冶郎に哀慕せるを以て栄とす。其心術の陋劣を知るべ。吾不肖なれども國禁を犯さず。不仁不義の行ひなし。年々に編次する物の本い

世ハ稗益なしとの人ども。大官允可ありて刊行の書肆。并ハ書画工厥人貸本屋等まで。是ハ由て衣食とするハ彼一人聲を唄して云云と罵るハ人の名利を娼嫉ハあらぎや。竟ハ今江戸ハ戯作者多けれども。他吾を論じて這悪言を出しぬるハ既ハ学問ありて。児戯の笑子を旨と綴るを。似げなくそ憎むあやまんと是爭を好て他焉ぞ吾志を知ん。昨今あの赤水餘稿を這地の書肆らハ尋ハ其書名ばかり知る者なし。是ハ賣れざる冗籍。他其書を賣んそ吾名を假りて編中ハ這悪論を載る欲是も甚だ知るべからぬ。并を解嘲の文を作らば。他ハ謀る所ハ稲で赤水餘稿の報筆を世ハ引くハしも似しるべし。已ねくと推制ハそ毫も掛念せざるべし人ハ告ぐ忘れ言ハ便宜ハ思ひ出て傷れば三十餘年の昔ハ多くハけう人さまぐの世ハこそ。ひとつ火盤を曳とせて一要時烟を吹程ハ頭陀ハ只管感服して翁ハ唐の張公藝の亜流ハもやあるべからん。

忍辱ハ我佛の第一の教なれども。野衲等ハ及所ハ知らぬ。現ハ漢学をもつる者ハ。反徳多謹慎の理を思ひ。動もまれば論を好て人の悪をいふ者あり。況悪名を悪として論じて怨を思ハざるハ。俗ハ無法馬鹿物ハ庶るべし。翁ハ熟々其悪論を忍ぶべき只感服の外ハなし。就て又問まる近曽這地の書賈等ハ。翁の舊作なる画策子物の本を恣ハ再板して是を翁ハ告ぐ己ハ自恣出像を新くして剰ハ像賛詞書などを増減もあり。是を新板と偽り賣僻ハ翁の辨論ありて本傳の附録などハ識着けるハ。是を知れり。今茲辛巳春正月下谷なる書肆英某ハ刊行なる雅俗要文。翁の著述なるハ。猶疑ひ思ハよりあり。其書の自序ハ天保十二年春正月とあり序ハ其月ハ躰て彫なして發販さべくもあらぬ。且編左ハ故賢郎琴嶺君の畧注なり。賢郎ハ七年以前乙未夏五月八日ハ物故しぬるハ。翁の自序の文と歳月ハ

是相遥あり。且其書ハ著作堂馬琴作と録したれども。馬琴ハ翁の戯號也。合巻物の本ハ自稱なれども。譬ハ南畝の戯號狂詩ハ寢惚先生の狂歌ハ四方赤良又香花園と稱するが如し。意ふふ雅俗要文ハ戯作ふふねべ。戯號を録したれども。且文中ハ誤寫あり。翁の校訂を經ざる者ハ似たり。這幾甚麼と問れしハ主人答て然ばとよ其とられ拙著雅俗要文ハ文政十一年の春江戸伯樂町なる書肆永壽堂西村與八の需ハ応じて同年の夏六月稿本成しを登時與八ハ取らせ紀其後彼書肆ハ活業如意なるを刊行ありしと聞て。詣來ることもあらざりしハ。今茲二月時候雅俗要文出版なるうと人の噂ハ少知りてうち敬馬紀て其印本を買取らせて。婦幼ハ讀せて彼ハ今客僧のなるが如し。稿本の自序ハ文政十一年夏六月の吉とあり。且其序ハ永壽堂の號を載しハ彼英文ハ恐ハ寫更めて其堂號も自序の歳月も皆偽りなるをあらみる。這故ハ吾速ハ人せ英文許遣して其刊行の始末を問せしハ他ハ永壽堂の宅眷より吾稿本を購求めて。恥て筆工ハ再寫させて刊刻しいと云ども何ぞ風く吾ハ告て校閲を乞ざるや。且自序の歳月と序中の堂號を恐ハ寫更めるハいとく僻事也。又是等の著述ハ馬琴といふ戯號を録したるハ相応しからぬ。別又本文及畧注ハ誤謬あるを。後ハ思ひ改れども。永壽堂胡越の如くハ久しくなるまで其板下の寫本を見せねば徒ハうち過紀ゆき是等も必補刻せざる者乎。先自序の歳月と馬琴の二字を速ハ削去るべしと重ていひ遣ハしたれば。羨りいひぬ。風く告まるべくしハ然るよしハ心もつて。今さら畏りいとのふ答のまゝ。文をうつ。鬻ハ發販もうしよう。既ハ一千ばかり發るとりべいふうひあるべや不日や心許ハ。然而其印本を婦幼ハ讀せ紀メハ咸傷

訓へあらるゝ。文字の轉讀みよう〳〵惑ひて詳ならざる。靴を隔て癢を搔くも劣りぬべし。然れば今ゝ至りて讀む果さねば誤を正さゝ由なし。只單葉の傍訓ひとゝ

たるゝを。ヒトヘハと誤らる類僅か二三と知るのみ。又三月の部。雛遊の畧注か

飛鳥井栄雅老君の歌を引て都のそやうしのゝ〻ゆくぞひなのゆとびも

思ひやるゝ。とあるのゝゆくそをのゝゆとの誤。這義は

あは筆工の誤寫。又雜部三十八の本文ふ竹都神宮とあるは誤。這義は

吾友伊勢松阪なる小津桂窓の考あり。道く竹の都ハ齋宮のあり迹を

ふ。神宮ようへ路の程相距支三里許なるを清水濱臣も知らず。神宮のなる

と思ひ誤らる。竹都を故郷とよ〻し。古歌もあるとゝ又同人の評の畧注の

中。標識稱謂辨の下ふ樣とふ〻は近世の俗稱とあまたども。永享中の古

書ふあの言ゆれば近世とゝらんいらずあるべゝとゝ理りあるふ似たれども吾

思ふ〻ようへ考らるゝのみ。天朝ハ天地定りて以来。革命の世代なりしハ二三百

年の昔なれ。猶近世とふべ〻あの辨ハ文ヨタけまべ畧を。異日折もあらば又ふべ。

又雅俗要文の顛末ふ似たるすあり。寛政年間京なる中川新七とふ書賈

江戸ふ僑居しあり時。他が需ふ応じ。花鳥文素とふ。婦女子の要文一卷を

綴りて取せ〻ふ文化元年甲子の春のなる。近江屋新八と合刻ふまべ〻ものゝ

這年新七ハ京へ還りて又來るとも。みけれべ其稿本ハふ〻りけ〻ゝ

ちて。三十八年を歴たる。今茲初夏時候。吾相識書肆森屋某とふ者花鳥

文素の稿本を一書賈のまより買含て。反て吾ふ告る知らせ。刊刻ふ〻と告る

者あり〻べ吾又うち驚ぬ。則人を森次許遣し。花鳥文素ハ昔吾中川

新七ふ綴て遣ま〻疎文ふて。何なるを書うるやらん。今ハ忘れられども必拙るべ。

然るを吾ふ告ぐ校閲をも乞ぜ〻。刊刻ふぬるハ甚非〻和主是ふの第子を彫

まくのしくに吾又別に綴りて取まべし。先其稿本を見せよとのいせしに他合て花鳥文素の稿本い既に書林行事免許の印信のまべ曩に刊刻去いひぬ。汗を先生に告て校閲を乞ざりしに故あり。先生い刊刻の疎悪なるを嫌ひ吾に其剞板い彫刻宜しからざるまべ。見せまるとも意に稱ふべからぎ。と思へべとのり。這故に吾又別人をもて遣しといり趣ちろ況ごし其板疎悪なるべ吾買取るべし。其刻本を見せよと重ていりせしに他又合て否一本に倣せしふめるぎ。百人一首の附録に去ぬるに其製本皆賣出しを今いまし。異日揭せを見せまるるまべしとのいしのに。今日まで竟に見せぎ。他い十稔許さるる比まで年々に吾に戲墨を乞ふて赤本事始又女西行又金魚傳まどの合巻の画策子を夏く刊行せし者なれど今い然る要事なけまべ自恣理不盡なるものをのいふめり。吾ひて談ぜんと思へども吾脚久しく衰て便轎にのるぎ。既に六日の菖蒲十日の菊にのるに身さへ心を役せられんい本意にのるぎ。況てかる煩紀ふとも吾ひまるひめるぎと思ひ捨て果さでり紀只彼二書を具眼の人の徒る故に知らで論ずる者もめるん欤とそ言又是にも及るに書肆い利の為に刊刻去作者い名の為に恥るとのり氷炭何ぞ合ん。或い吾舊作を再板七新板と偽り。或い吾舊稿を購合て恣に刊行を異竟吾名號を售る者ゆそ其書の好否を知れるにめるぎ吾名號を售る者の吾に告ずして各恣なるい抑何なる意ぞや世の俗情の偏強なる理に暗く利に捷きなる大槩いかくの如し。鄙語に云長生すれば恥多しとい吾上にそめるべけれ。うち呟紀ふりければ頭陀い然にそと慰めて人文字ある時い苦労多しとのふ志への人のいひけんも理りに就て又問まるる。朝曳巡嶋記又侠客傳美少

年録をども。倘半分ふして結局までに遠うるべ。況ふ翁の病眼りくの如くなれば續出さるべうかさるべ。百年の後凡筆をもて他人の是を續ぐ者あらば事損ねあるいつめとのべ主人い點頭て然いと唐山ふもかくるひわり雁宕山樵ふ水滸後傳。天花翁ふ後水滸傳及續西遊記後西遊記の如きに作者の隱微を知らを七叨ふ蛇足を做ふ者と這故ふ約是ど玉のいまぐ全うふぎとて尾をもて是を補つ。誰ふ連城ふ代まくせんや縱令和ふぎとも。鼻を捺ぶて走るべ己を知らぬ人を知らぬる。似而非作者い唐山ふもかけり。开い左まれ右もあ巡嶋記俠客傳い刊ふ浪速の書肆ふまべ其書画板下の寫本を両工ふものさをて遣きふ吾老て厭く且志も異ふまべ老眼かくの如くふぎる時ふ。笔用ふ七今ふ至ふ。但俠客傳い吾得意の戯墨也。世の看官も五輯六輯の出を俟つ者ふ多ふ。是まで續出さるいふの故と又美少年録い本傳と

等ふ丈溪堂の藏板ふまべのて結局まで。編果さまく思へども既ふ上ふ。いる知く。婦幼ふ代寫さをぬまべ果きんや否や我ふぎらいまぐ知らぬ。隨筆をども。丈溪堂の需ふ応ドふぶ。年來抄録ふける書どもを讀ま。其人みけれべ。ひよくうさう。只長夜の徒然ふ吾舊作の物の本の三十有餘年ふ及べるを。婦幼ふ讀せそうち変ふ世を隔る人の戯墨を創て見る心地して。忘まてるとのく。ふ況其文の拙きに。作りざるをども。ふ。今ふべかくいあらじを思ふる。有昔衛の蘧伯玉い五十ふして四十九年の非を知るとのう。他い異邦の大賢ふまべ五年毎ふ一化て非を知るも易かるべ。开ふ及ぶべくもあらざうー。吾い偶昨非を知るのみ。然べ本傳ふも初筆い二十八年前の舊作。四輯五輯ふまべ。體裁今と同ドらぬ。开い昨の我ふ贅て且流行同ドらねべ因て又憶ふ本傳第一輯二輯ふる。八房の

頭陀二さび
著作堂ふ
来訪も
廻國ばぐ

仁壽唯
香曙樓国貞画

犬の毛色の形牡丹の花に似ることを訝りて這義を吾に問ふ者関東陽後後山英子其他もありけり。其後故児興継鈴有年疊翠君なども訝りしを。當時吾答ぎ本傳結局に至りなば。おのづから知らるべしとのみ。其問ける友人は皆同好の士なりしに或は二十四五歳或は三十七八歳にて皆不幸にして身故りぬ。業平朝臣の歌なりねども。吾身ひとつはいとの身にして。鄙に彼八房の犬の毛色の一鮮を終るに及びて。憮然として懐舊に堪ぎ口授の筆を止るに及べり。只その落涙のみなりぎ。吾智音の友の本傳を見果ぎて早く鬼籍に入りし者出羽の茂木巽あり。江戸の蒲生秀實あり。伊勢の櫟亭琴魚あり。是等の文化文政の間に終り壮佼の今茲に又輪池孤雲奈須の三翁不録の人なり。其數はわいねども。去歳の秋に老妹を喪ひ今茲の春に老荊逝きぬ又翠君に書画を。小説を嗜る同好の風流士なりしに初老なりぎて陽月初五に彼訃あり有信れば廣

大江戸に智音の友に地を拂て今は一人もなぎぬ只牟礼松阪の西他郷に默老條齊桂窓の二同好あるのみ。和漢の才子大部の書を著す者多れども一世一部に過ぎざるのみ吾は大部の戯墨四本まで終らまく惜しけれ故に果ざる者三本あり。幾ばく生ても足ることなければ長生も亦如なりぬを今悟ることを悔しけれとのみつ歎息ぎつつ頭陀も俱に鼻うちうしなへば翁の洪歎理なり。但翁の相識知音のみるいぎ。江湖上に物の本を嗜る少壮のいまぎ這書を見果ぎて早逝きけるもさぞあらん。獨安房上總人は八大傳を見ぎとのみ故何と問へば里見氏は我國の基本。他郷の人の作見るに及ぎとのの者ヨヤ。と告れば主人はうち笑ひて田舎児の頑なり。然る僻意もヨタなるべし。蓋稗史物の本は皆架空の言のみ。何ぞ其事實を問んや。只其作りざまの新奇なると文の巧致を弄ぶのみ。譬へば呉蜀の人三國の事は我國に基本。他郷の人の作は見るに及ぎとて三國志演義を讀ざる者はいんや。笑ふべし。當時上野に里見氏あり。安

房の里見と同宗ゆゑ。桐生ふ在城を後ふ由良國一里（書ふ玉簾信ふ）伐滅さる其餘亂出羽ふ到りて藻上氏ふ臣とし仕へて六千石を領をとゆふ里見越後是る〻ふの人後ふ罪ゆゑ死を賜ひゆゑ其後又奥ふ忠臣里見十右衛門ゆう房總の人是ゆゑ亦何とゆふや然べ本傳ふ地名ふども今と同じゆゑ者ゆゑくゆう壁ゆ安房の富山の如きい土人今ハ是をトミサンと嘆做しゆうゆゑ本傳ふハトヤマとを是ゆゑハ雅俗今昔の差別ゆれいと又洲崎ハ土呼スサキと然るを本傳ふハスサキと讀せて江戸深川ゆう洲崎と同稱ゆゑ只是のみゆうぞ三國志演義ゆう落鳳坡又水滸傳ゆう史家村の如く作者の作設けゆう地名ゆゑとゆふ蓋稗史小説の自由ゆう有徒とを恥ゆふゆゑ土人ハ今の稱呼と違へるゑ笑ふもゆゑん并々小説の小説ゆうを知ざるゆれば辨まるふ足らぢ又人名ふども胡意稱呼を異ふして實ふ据らざるも間是ゆう譬べ足利成氏ハ讀て是をシゲ氏とゆふべ。何とゆうらべ當時足利学校ゆう一老僧の隨筆ふ成氏を重氏と書ゆうゆう是ふ由てゆうれを觀べ成氏の和訓シゲウヂゆう支疑ひゆゑ。ふの義ハ近曾南訓莽言其他の隨筆ふも載られば吾辨を俟ぢゑ知る人ハ知るべけ是因て憶ふふ結城成朝ハ持氏重氏の餘黨之重氏の一字を授けられ是ゆう狀然べ成朝の成ゆ字の如くゆゑゆゑで讀てシゲトモとそりふべけ是ふの例をりて推をゆゑハ里見義成ゆ當時の稱謂ハヨシシゲゆう〻狀是ゆ亦知るべゆうぞ去ゆ是ども本傳ふハ胡意其実ふ由らぢ則世俗の訛まる隨ふナリウヂ。ナリトモと傍訓せしハ實録ゆうぬを諦をこ开ゲ中ふ両管領定正顕定ゆゑ其名の和訓を異ふせぢ反て酷く貶せしハ古將を弄ぶふ似ゑ是ども亦ゆゑ彼両管領ハ父祖の時ゆう君臣の礼即を思ひぢ是乱世の一驍將太平の逆臣ゆれべ下剋上の罪を心誅せざるゑを沼ぢ且定正の不支ゆう。顕定の機変ゆう。俱ふ久しゆゑぢして

子孫凋落ふ至りしへ父祖の不忠の餘殃ぞ竟ぬ天理順逆の應報あると世の看官ふ悟らせんとそかくはぞふ作設けし愚意ハ鄙語ふゆふ胡虐とう出し真實とゆいふべくふん然ばその物の本ゆハ是笠の用意ヲうれども房總の人ハさらゝゝ大を悟らぬも多ゆりべしと論ずる程ふ人定の鐘の响くふ頭陀ハ驚ぎて憶ぎ小夜を深したり告別禀さと遽しく身を起しつ跌ぎて行燈托地と推仆せば主人ハ吐嗟とぎろふ叫ぶ其聲ふ驚ろきぎて愕然として覚來れば是思ひ寢の云夢ぎり紀噫嘻盧生の栄華ハ五十年。本傳作者の筆労ハ正ふ是二十八年。孰ぞ夢ふゆめざりける其初憂の富士茄子。鷹と犬と明輩の犬物語を畫しぬる詩あり歌あり又證とも戲墨新奇長 多編有是書 學仙師硯壽 毛瀬汝何如世ふ遊びて身ハ隱れ蓑ぐくゑ笠あぎゐる名のみ打出の槌

南總里見八犬傳第九輯巻之五十三下大尾

○南總里見八犬傳第九輯巻之四十六至五十三下 畫画彫工目次

出像畫工

柳川重信
溪齋英泉

巻四十六 巻五十 谷川
巻五十二 亀井金水
巻四十七上下 巻四十八 對二樓音成
巻四十九 巻五十一 巻五十三上下 高谷熊五郎
巻四十六 澤金次郎
巻四十七上下 高谷熊五郎
巻四十八 澤金次郎
巻四十九 高谷熊五郎
巻五十 澤金次郎
巻五十一
巻五十二 同右

巻五十三上　米藏　幸太郎
巻五十三下　高谷　熊五郎

剞劂人

全書二十一輯毎輯五巻約為九輯共百六巻刊刻終れり

近世説美少年録第四集　作者ハ去ぬる中絶の所今度八犬傳全部相揃ハ間猶又作者ハ去ぬる中絶して推續ハ当寅の十二月出板可仕　全五冊

著作堂一夕話前集　大本三巻　近刻

南總里見八犬傳總傳全書　第一輯首巻總目録姓氏目并ハ八犬士畧傳共ハ一巻末刻　全百六巻

右八犬傳全書百六巻首巻總目録ハ前書ハ断如中上ハ延引仕ハ此外ハ皆板不残相揃ハる是より毎年一輯毎ハ弥無滞摺出し并ハ此跳雁皮紙摺合巻箱入製本仕ハ不相替追々ハ求ハ覧可ハ成下ハ

欽白

刊行江戸書林　文溪堂

○家傳神女湯　一包代百銅　婦人ちのみちの妙とおよそ乳無の三症ようやさる法ハ婦ハ用ひてその功むりもとのごとしー

○精製奇應丸　某性をそこなひ精をつまがらかし七変ゆ家傳の加ワ丸ハ其ものとりもとの功神の如ー　大包代金弐朱　中包代一朱ト　小包代ハ　ナ三ろ弐仕

○熊胆黒丸子　一包代五ト　くまのいけをもつて丸ハ七ハ　のりをもつて　ハ　ハ真製ハ

○婦人つ紀虫の妙薬　一包代六十四文　つね虫ハ　ハ　ハ　ハ用ひて　ハ

制製藥本家　四ツ谷あるのの町　千日谷の上　瀧澤氏

弘所　江戸元飯田町中坂下南側中程　なゑ沢氏

仙女香　一包代四十文　江戸京橋南傳馬町二丁目　坂本氏

大阪　河内屋喜兵衛　東京　須原屋茂兵衛
同　伊丹屋善兵衛　同　山城屋佐兵衛
同　敦賀屋九兵衛　同　小林新兵衛
同　秋田屋太右ヱ門　同　丸屋善七
同　河内屋茂兵衛　同　和泉屋市兵衛
同　河内屋和助　同　須原屋伊八
同　秋田屋市兵衛　同　出雲寺萬治郎
西京　出雲寺文次郎　同　梅屋喜兵衛
同　村上勘兵衛　同　近江屋半七
同　勝村治右衛門　同　長門屋龜七
同　杉本甚助　同　三家村佐平

名山閣　東京芝大神宮前書舗　和泉屋吉兵衛發售